

八十一歳、最後の溪流釣り

白鳥 俊 男

二十代後半から始めた溪流釣りが、五十年以上続いている。

最初の頃は、登山の時に山麓で試みた程度だが、何時の間にかその魅力にとりつかれて、釣り専門の山行に変わっていった。

その当時は、釣り人口も今と比べれば少なかった。その理由は、現在のように多様な趣味を楽しむことが少なかったことと、林道が山奥まで開通されていなかったし、且つ、誰もが自家用車を持つという時代ではなかった。釣りに行くには歩くしかなかった。

秘境と言われるような、奥深い所へ行くには重い荷物とテントを背負って行かなければならないので、入渓する人は限られていた。

その頃は勤めている頃だったので、大体は一泊二日、休暇をもらってもせいぜい二泊三日で、大井川の本支流、井川とか寸又峡がほとんどだった。一人で入渓することはなく、山仲間の二人か三人が一緒だった。

一つの思い出として、南アルプスを縦走して井川へ下山した時に、現在の畑薙ダムが建設中で、湖底の沼平



の川原へキャンプして、釣りを試みたら尺アマガゴが数匹釣れた楽しい思い出がある。

六十歳で定年退職した後は、時間が自由になるので、自由気ままに登山や釣りを楽しんできた。山仲間も仲間も皆行かなくなってしまったので、単独行になる。

山登りは、年と共に大変になってきて、何時の間にか止めてしまって、溪流釣りだけが残った。行く先も固定して、ここ十数年は、大井川支流の寸又川の又支流の逆河内最上流の、アケ河内とタケナギ沢の合流点から奥を釣っている。理由は単純で、魚影が濃くてたくさん釣れるからである。

この川には、昭和五十年代にアケ河内とタケナギ沢の合流点まで、十八キロの林道が開設されて、平成の初めの頃まで、木材の搬出が行われていたが、二十年以上前から林道の崩壊が続き復旧がされないまま、全くの廃道になって、今では入渓する人はほんのわずかになってしまった。その当時の小屋が数ヶ所残っていて、今でも利用できるものもあるので、そこへ泊まって入渓することになる。

以前は、五月と九月に入渓していたが、日数もかかるし、体力も弱くなってきたので、最近では日の長い五月に一回だけ入渓してきた。

平成二十五年五月下旬に、週間天気予報で好天が続くことを確かめて、四日間の入渓をした。

五月二十三日 晴

出発が遅くなって、午後六時になってしまった。奥泉の駐在所へ入山届を提出し、(万一の場合を考えて、毎回出すようにしている。)寸又峡温泉へ八時に着いて、一番入口の翠紅苑で入浴し(五〇〇円)、さっぱりしてから一杯やって、十時頃眠りについた。

駐車場は、一般の駐車場の三百米位手前の釣り人がよく利用する所で、釣り人の情報交換の場にもなっている。

五月二十四日 晴

三時半頃目が覚めた。そろそろ夜明けで、四時には完全に明るくなる。四時五十分に出発して、自転車(マ

ウンテンバイク)で千頭ダムへ七時に着いて朝食になる。(昨日の夕食と今朝の朝食は、すしを買ってきた。)ここから、いよいよ山歩きになる。

身ごしらえは、ズボンと長袖シャツ、足はスリッパを防ぐための、スパイクの地下足袋、落石と木の下をくぐる時の頭の保護のためにヘルメットを着用し、崩壊地の横断の時に足場を切ったり、万一スリップした時の確保のためにピッケルは必携品だ。

一時間十分登って、寸又川左岸の日向林道へ出る。ここは起点から三キロの地点で、大無限山の登山口だ。ここから約一時間は下だりで、四キロ地点あたりに、新しい崩れが出来ていた。全区間では、特に危険な崩れが四ヶ所あるが、その最初の崩れだ。林道上に四十五度以上の勾配で崩土が溜まっていて、この通過は危険だ。下は寸又川で、高さは三十米位はある。滑り落ちたら怪我位では済まないだろう。天端から三分の二位上の位置へ、ピッケルで足場を切って渡るのが、足場を切っている最中にも、上に溜まった崩土が崩れ落ちてきて、すぐに埋まってしまう。幅は十米足らずだが、渡り切るのに十分以上かかった。しばらく歩くと左手から逆河内が合流してくるのが見えると、間もなく寸又橋で一時間かかった。橋を渡ると寸又川右岸で、ここから上りになって約三十分歩いて乗越を越すと、寸又川と分かれて逆河内の左岸沿いに終点まで颯行することになる。ここからは落石が多くなり、場所によっては積み重なっていて、部分的には普通の道を歩くのと比べて、二倍位の時間がかかる。

悪い条件ばかりではない。四月の新緑が落ちついた深緑に変わり、季節の進行の遅いこの辺りは、今が藤の花の最盛期で、至る所に高さ二十米以上の大木一杯に咲き誇っていて、目を楽ませてくれる。また、寸又川特有のエゾハルゼミが鳴き始めていて、ヒグラシに似た鳴き声が郷愁を誘い、疲れを癒してくれる。

八・五キロ地点に、対岸の白沢へ渡る無想吊橋があるが、三分の一位の横板が無くなっていて、通行禁止の立札が建てられていた。

この吊橋は、対岸の白沢の造林小屋への道で、不動岳への登山ルートにもなっていたが、今では利用者もな

くなっている。

七、八年前までは、このあたりまで整備されていて、バイクで入ってきて、日帰りでも入渓する人が多かった。この先の九キロの小屋で昼食になる。

小屋のすぐ先の橋桁が落ちてしまって、全くの通行不能で、ゲートが設けられている。歩行者だけが、高捲きをして通ることが出来る。十キロにも小屋があるがここは通過。

十一キロ地点に大きな崩れがある。下は百米位切り立っていて、一気に川まで落ち込んでいる。崩土の勾配は幾らか緩く、一番上の方に足場が切つてある。下を見ると目が眩むので、足元だけを見て渡る。幅は十米位。十二キロ小屋へ二時半に着いた。二間四方の広さで、三方に五帖の畳が敷いてあり、中央が土間になっている。この小屋は地の理が良いので利用者が多くて、七年前に四人同宿した事がある。その後荒れ果てて、昨年は何とか泊まる事ができたが、今年は全壊して泊まれる状態ではない。卓上コンロを置いてあったが、雨漏りがひどくて錆びついてしまって、ボンベをセットすることができない。

それでも無理に叩き込んだらセツとできた。

点火装置は回って、ライターで点火できたので、袋に入れて提げて持って行くことにした。

三時に出かけて、十四・五キロの小屋へ五時に着いた。朝の五時から十二時間も動き回ったのに、あまり疲れを感じなかった。

急ぐことなく、ゆっくりペースで歩いてきたのが良かったと思っている。この小屋は大きくて、入口を入った所が六帖の土間、その奥が六帖間、左手に一間の廊下が通っていて、右側に八帖間が三部署続いている。その奥に勝手場があり、外にトイレがある。

昭和五十年代から平成の初めまで、十数人の人達が生活していた様子が伺い知れた。

水場は一分足らずの所に、岩から水が滲み出っていて、一分間に四リットル位溜まる。

夕食はソバで、卓上コンロが使えたお陰で楽に出来た。六時頃から、少しのツマミとソバを肴にして、ウイ

スキーで一杯やって、七時には寝てしまった。天然のミネラルウォーターは、何とも言えない最高の味だった。
五月二十五日 晴

三時半に目が覚めて、四時五十分に出かけた。少し先の水場で朝食、ご飯を炊く時間を節約するために、今日から三日間の朝食と昼食は、パンとチーズだけの簡素なものにした。

約一キロ先に、大きな崩れがある。四つの崩れの中で一番危険なもので、遙か上の方から、山肌全体が林道と共に削り取られていて、傾斜も六十度以上はある。横断も真横ではなく、最初は一米位下だり、次に五米位登って少し横に渡り、今度は五米位下だって、最後に五米位登って林道へ出る。

幅は二十米位だろうか、特に取っ付きの所が、足がかりが無くなってきている。
十七キロ地点に、最も大きな崩れがある。

幅は三十米位、高さは三百米以上で、林道諸共川まで崩れ落ちている。五年位前まではピッケルで足場を切て渡っていたが、中央部に深さ二米位の溝が出来て、通過不能になってしまった。一旦川まで下って、又登り直すので約一時間はかかる。その先に大きな崩れはなく、道も歩き易い。十八キロ地点の林道終点が、アケ河内、タケナギ沢の合流点で、九時十分に着いた。十年位前には、十二キロ小屋から三時間位で来たことを思うと、倍位の時間がかかるようになって、八十歳を越すと、こうも体力が衰えるものかと実感した。

まず、アケ河内を釣る。餌はミミズで、二百匹用意した。この川は、十数年前に初めて入渓した当時から、土砂で淵が埋まって平瀬になっている。それでも、膝位の深さの所ではよく釣れたものだが、今年はさっぱり釣れない。十一時まで釣り上ってたった四匹だけ、これでは仕方がないので、合流点まで戻って昼食を済ませ、タケナギ沢を釣る。

この川は淵が多く、魚影も濃い。それでも例年のことを思うと、半分も釣れない。

午後一時に竿を納めて合流点まで戻り、魚のワタを抜いて塩漬けにした。釣果は十三匹で、アマゴ四匹とイワナ九匹、最大は二九・五センチのイワナ、小さいものでも十八センチ以上で、型はまあまあだった。以前は



アマゴの方が多かったが、ここ数年は逆転している。一時三十分に帰路についた。十七キロ地点の崩れを川へ下った所に、大きな淵がある。昨年はここで七匹釣れたので、今年も試みたが全然釣れなかった。

六時に小屋へ戻って、一番小さなアマゴを塩焼きにし、ソバを作って今日の慰労会をやる。今日釣れなかった理由を考えてみて、若しかしたら、最近釣り人が入ったためではないかと想像した。

五月二十六日 晴

今日は近くを釣ろうと思って朝寝をした。

六時に出かけて、少し下った所の小さな沢の湧き水で朝食、十二キロ小屋の近くに川へ下だる道があって、川へ着くと八時だった。

川を下だりながら、淵を覗いてみる。淵の尻には魚が見えるものだが、三つの淵では全然見えなかった。こんな事は今まで初めてだった。なおも下だって行く途中の砂溜まりで、足跡を見つけた。靴の形から見て、二人の足跡だった。この前雨が降った後のもので、せいぜい一週間位前のものだろうと想像した。

人が釣った後は釣れない、というのは溪流釣りの常識だ。三十分位下だった所が、十一キロの崩れの真下で広河原になっている。

足跡を見たので、これ以上下だっても釣れる見込みはないので、ここから釣り上った。

果たして釣れない。下りてきた地点までの間、アタリは全くなし、更に三十分位釣り上った所で、ようやく一匹釣れた。この逆河内中流域は、良い淵が適当にあって、楽しい釣りができる所だ。このあたりで釣りをする時、何時も決まって不思議な現象が起こる。水の流れる音が音楽に聞こえる幻聴だ。メロディーも歌詞も判らないが、若い女性の美しい歌声に、しばらくうっとり聞き惚れていると、何時の間にか聞こえなくなってしまう。この現象は、何年も前から続いていて、この場所だけに限られている。このところ日照りが続いて水量が少なくて、せいぜい膝までの深さなので、渡渉は安全だった。絶壁の中の、大きな淵に出合っただけで、更に上流へ行くには、大きく高捲きをしなければならないのでここで止めた。時間も十二時になったので、昼

食を食べて帰路についた。

それでもぼつぼつ釣れて、釣果は九匹、アマゴ二匹とイワナ七匹、ここでもアマゴとイワナが逆転している。型は二十センチ以上で良かった。この区間での過去の最高記録は三十七匹で、今回は最低記録だった。

下だる途中、何でもない所で滑って、背中から落ちて、上半身ずぶ濡れになってしまった。川の水は冷たくて、上衣を脱いで絞ったが、かなり寒い思いをした。幸い日が当たっていたので、しばらくの間日なたぼっこをして体を温めた。

今日は早帰り、四時半に小屋へ着いた。

イワナの小さいのを塩焼きにし、ソバを作って最後の夜を楽しんだ。

五月二十七日 晴

妻が明日から旅行に出かけるので、どうしても今日中に帰らなければならない。

四時五十分出発、今日は全体的に下だりなので楽だ。

二百米位歩いた時、積み重なった石の陰にマムシが居るのを見つけた。幸い私が先に見つけたから良かったが、若しもうっかり踏んだりすると、噛まれる恐れもあった。後から来た人が噛まれることがないように、ピッケルで頭をつぶして殺した。

またしばらく歩いた時、林道上にカモシカが居るのを見つけた。カモシカは、すぐに逃げない習性があって、じっとこちらを見ていたが、十米位に近づくとようやく逃げた。カメラを持っていけば、写真を撮るところだが、溪流釣りの時はカメラは持たない。カモシカは下へ降りて行ったが、通り過ぎてから振り返ったら、下の斜面に居た。

十二キロ小屋の水場へ、六時二十分に着いて朝食、十一キロの崩れは、来た時よりも楽に横断できた。最後の四キロの崩れは、来た時に切った足場は完全に埋まっています、何処を渡ったのか判らなくなっていた。来た時と同じように、三分の二位上の方へ足場を切って渡る。ここを渡ってしまえば、もう危険な所はない。転石

もほとんど無くなって、歩き易くなっている。

千頭ダムへの下り口へ、十二時十分に着いて昼食、千頭ダムへ下り、ここからは自転車を下り坂なので楽だった。寸又峡温泉へ着いた時、丁度パトロール中の駐在さんに出会って、下山報告をした。駐車場へ三時着、帰宅は五時十分前だった。

今回の溪流釣りは、五十年来続けてきた最後の溪流釣りにしようと決めていた。

その理由の一つは、体力の低下である。

七十代までは何とか頑張れたが、八十代になると極端に体力が衰えてくる。

一日目は十二時間、二日目も十二時間、三日目は十時間、四日目も十時間、ずっと動き続けていて、体力も限界に近かった。来年になればもっと弱くなるので、体力も限界だと思われる。

二つ目は、危険への対応策だ。五十年来の釣行の中で、寸又川源流の柴沢で滑って、肋骨にひびが入った以外に、怪我をしなかったことは幸運だった。とにかく溪流釣りは危険が多すぎる。万一事故に遭って、大勢の人達の世話にならないうちに止めるのが無難だ。

三つ目は、溪流釣りを八十歳まで続けたいという目標があったが、それは昨年達成した。

そうなる欲が出るもので、八十一歳と四ヶ月になって、今度こそこれで終わりにしようという気持ちになったためである。

五月二十七日に帰宅してから、一ヶ月が経つ。行く前に六十五キロ台だった体重が、六十一キロ台に減って、腹の贅肉が無くなり、体の動きが楽になった。このままの状態で大食いをしないで、良好な体調を維持していきたいものである。

半世紀にわたって、健康にも恵まれて、好きな溪流釣りを、思う存分楽しんできた幸せに満足し、もう思い

残すことはない。